



SUPER GT 2021 LM corsa Rd.2 FUJI GT500Km Report

日付:5月4日 天候:晴 コース:富士スピードウェイ 気温:21℃、路面温度:35℃(スタート時)

Final day Summary

3番手からスタートしたSYNTIUM LMcorsa GR Supra GTは
2人のドライバーが好タイムでラップするとともに
チームが完璧なピット作業を行ない、500kmの決勝レースを制する

4月10日-11日に岡山国際サーキットで開幕した「AUTOBACS SUPER GT 2021 SERIES」。今季も新型コロナウイルスの感染拡大を防止する対策を施しながらシリーズがスタートした。昨シーズンと異なるのは、予定通りの4月に開幕したこととサーキットに観客を入れた状況で開催されていることになる。第2戦も入場制限などは行なっているものの、富士スピードウェイには多くのファンが駆け付けた。

第2戦はゴールデンウィークの恒例となっていたFUJI GT 500km RACEで、5月3日(土)に公式練習と予選、4日(日)に決勝レースが実施された。

LMcorsaは開幕戦の好調さを維持したまま3日の公式練習では様々なセットアップを試し、ニューマシンとなるGR Supra GTのパフォーマンスを高めていく。予選Q1では河野駿佑選手が開幕戦から連続となるトップタイムで予選Q2へ進出させると、予選Q2では吉本大樹選手が3位を獲得。500kmの決勝レースをセカンドローという絶好の位置からスタートすることとなった。

決勝日の4日も朝から富士スピードウェイは好天に恵まれて、12時55分から始まったウォームアップ走行の時点で気温は20℃を超え、路面温度は40℃に迫るなど5月としては暖かい気候での戦いとなった。



20分間のウォームアップ走行はスタートドライバーを務めた河野選手がSYNTIUM LMcorsa GR Supra GTに乗り込み7周を走行、続けて吉本選手も決勝レース前の最終チェックとして4周を走行した。500kmの決勝レースは予定されていた14時30分にスタート。今戦は通常より走行距離が200km長いため2回のピットインが想定された。スタートドライバーを務めた河野選手は、宣言通りにオープニングラップの100Rからヘアピンコーナーで先行していた55号車のNSX GT3をパスして2番手に浮上。トップを走る61号車のBRZ GT300を追った。1周目のコントロールラインを通過した時点でトップとSYNTIUM LMcorsa GR Supra GTの差は0.7秒で、このギャップを維持したままのハイレベルな首位争いが20周以上続くことになる。その間の9周目には1分37秒577のファステストラップを記録し、マシンの仕上がりの良さを示す。20周を過ぎると上位争いをしてきた数台のマシンが1回目のピット作業のためにピットレーンにマシンを進めた。29周目には落下物を回収するために今回から採用されたFCY(フルコースイエロー)が導入される。このリスタート時にトップの61号車とSYNTIUM LMcorsa GR Supra GTのギャップがやや開いたが、それでも5秒差の2番手をキープする。



39周目に河野選手はピットインすると4本のタイヤ交換と給油を行ない、第2スティントを担当した吉本選手にドライバー交代。GT300クラスの全車が44周目に1回目のピットインを終えると、7番手とやや順位を落としていた。それでも吉本選手は51周目に6番手に浮上すると、ラップタイムを上げて上位勢を追った。60周を過ぎると2回目のピットストップを行なうマシンが出始める。トップ5がピットに入るなかで、62周目には5番手、64周目には4番手、66周目には3番手となり序盤に競り合っていた61号車の背後に迫った。そして71周目のコカ・コーラコーナーで61号車をパスして首位に立つと73周目に吉本選手はピットへ戻る。第3スティントに向けてチームは4本交換を選択して河野選手にチェッカーまでの終盤戦を託した。

ピットアウトしたSYNTIUM LMcorsa GR Supra GTは、3番手でコースに復帰。トップはピットタイミングが異なっていた52号車のGR Supra GTで2番手はオープニングラップでパスした55号車、4番手には61号車がテールトゥノーズで迫っている状態だった。河野選手はピットアウトから数周ほど61号車のプレッシャーを受けるが、徐々に引き離すことに成功。そして、81周目の最終コーナーで2番手の55号車をパスし、トップのマシンを追った。中盤からトップを走っていた52号車とのギャップは9秒ほどで、残りの周回数を考えると追いつく可能性はあっても抜くのは至難の業。だが、87周目には7.7秒、FCYを挟んで93周目には6.2秒と徐々にギャップを削っていく。すると96周目に52号車はトラブルによってスローダウンを喫し、その横を60号車がすり抜けトップに立つ。



最終盤には2番手の61号車が差を詰めてきたが、河野選手は最後まで集中力を切らすことなく103周目に自信のSUPER GT初優勝となるトップチェッカーを受けた。

LMcorsaとしては2019年のオートポリスラウンド以来の優勝で、GR Supra GTでの初優勝を飾った。シェイクダウンしてからわずか2ヶ月だが、マシンのパフォーマンスを最大限に発揮させて優勝を果たしたことで、今季のシリーズランキング争いも面白くなるはずだ。

Team Comment



Director : 飯田 章

昨年は苦しいシーズンだったので、優勝できてホッとしています。今季からマシンを替えて準備期間は短かったですが感触は良く、2戦目で仕上がりも一段とアップしました。決勝レース前には悪くても表彰台、条件が噛み合えば優勝が狙えると思っていました。予選も決勝もですが河野選手が頑張ってくれて、それを吉本選手が的確にサポートし、チームもミスなく作業を行なった結果が優勝につながりました。次戦以降はサクセスウエイトでマシンが重たくなってしまいますが、チャンスがあれば勝負していこうと思います。



Driver : 吉本 大樹

今回は予選からマシンのセットアップもダンロップタイヤも合っていたので、決勝でもペース良く走れることは分かっていました。レースは、河野選手が担当した第1スティントで61号車をしっかりと追えたのが勝因のひとつだと思います。まわりの戦略は分かりませんでした。61号車とは最後までポジションを争うと感じていました。最後は52号車がリタイヤしたために優勝することができましたが、2回のピットストップともにチームはミスなくマシンを送り出してくれました。次戦以降は自力で優勝できるように、もっと強くなっていきたいです。



Driver : 河野 駿佑

今回はプレッシャーが掛かるなかで、予選Q1とスタートドライバーの役割を果たせたと思います。第1スティントは想定した通りに2番手になり、ペース良く周回を重ねられました。レース終盤は61号車と接戦でしたがミスをしなければ抜かれないと感じていたため、トップを走る52号車との差をチームには伝えてもらいました。最後はリタイヤで優勝できましたが、速さのあるマシンに仕上げてくれたチーム、そしてダンロップタイヤなどすべての要素がそろって勝てたと思います。同年代の選手が活躍する中でチャンスがあれば実力で掴み取ろうとは思っていたので、SUPER GTに参戦して2年目で優勝することができて本当に嬉しいです。

